

2015.8.18

現代俳句千葉

118号

巻頭エッセイ

俳句の傍らで

幹事 星野一恵



今年の初吟行は一月の半ば十六日、世田谷のボロ市でした。例年十二月十五、十六日と一月十五、十六日に市が立ち、都の無形民俗文化財となっています。渋谷の八チ公像前での待ち合せでした。結婚して二年程、東急文化会館の近くに住んでいましたので、とても懐かしい場所です。前日は雨風が強風嵐のような天気だったこと、当日の暖かすぎるほどの日和に恵まれたこともあり、世田谷線はボロ市目当ての人達で混んでいました。会場も交通整理の人が出るほどの大混雑で、しばらくは片側しか覗くことができませんでした。それでも人混みをぬって、重要文化財の代官屋敷や資料館などを見学しながら三時間近く歩いた後、遅い昼食を兼ねた句会となりました。何人が集まればどんな所でも句会ができることも楽しいところですよ。この年齢になって俳句をやっている方が増えたなあと思うと、近所で卓球を一緒にしていた友人が俳句の勉強会を始めたいのでやってみないかと誘われたのが縁です。丁

度その頃、子供の事も離れたのでパートの仕事を始めただけの時だったので、スポーツの乗りで気持ちが動き、近所で最後の楽しみがひとつ増えるのもいいかな位の軽い気持ちでした。幸い、卓球の仲間や子供が同じ小学校のお母さん達ばかりだったので、全員が初心者だったので抵抗もなく、若い時から卓球、テニス、スキー、山歩きとスポーツばかりしていたのでとても新鮮に思えました。ついでこの間のことのように思えますが、かれこれ二十四年も前になります。毎回、句会に持っていく分を用意するのに精一杯だったので、それを続けていたら月日がこんな過ぎていました。こんなにも長い間、続けてこれたのは、何も知らなかった私達を一から懇切丁寧に指導し、見守ってくださった、本当に素晴らしい師と、私を誘い導き続けてくれた友と、いつも切磋琢磨してきた仲間がいてくれたからこそと心より感謝しています。

今まで楽しませていただいたお礼の意味もあり、県の幹事を受けて二期目になりますが、他の地区の方々と交流できるように、大いに刺激を受けています。これからも楽しみながら俳句を続けたいと思っています。

目次

俳句の傍らで 星野一恵	1
諸家近詠	2~4
私の感銘句	5~6
津田沼研究句会報告	6~7
青葉研究句会報告	7~8
柏研究句会報告・ひろば	8
第4回ミニ吟行会 銚子犬吠埼エリア	9
図書紹介	9
会員・会友の近況	10
掲示板	10

諸家近歌

高橋 健文

生クリームのでて春苺の卑屈
躑躅には山の日照雨のよく似合ふ
眠くてならぬ小手毬の花咲けば
ゆく春をサンダル履きの街の角
筆ペンの墨すぐ乾く更衣

椿 良松

屈むれば青空へ瀧登るとも
サングラス世間の色を変えてやろ
蟻地獄覗く幼の目が熱い
過去は空つばあしたも空つば合歡の花
外は梅雨内に激辛焼きカレー

直江 裕子

蟻々と連らなりやすき肢体もち
大向日葵やるかたなきを支へをり
一通ずつ燃やす闇より火蛾生まる
ほうたるの消えしあたり身に入る
衰へを涼しさにして半跏趺坐

鈴木美津子

かなしみとなりゆく怒り寒夕焼
寒雷やダムに沈みし木がのびる
できぬ決断キャベツ一枚づつはがす
ゲルニカの牛にも涙沖縄忌
暗黒は焰のうしろ敗戦忌

田端 重彦

落蟬や鳴き尽くしたる貌と見ゆ
炎天下ナツクルウオークの雄ゴリラ
重陽や一万尺の小屋泊り
山小屋も抱かれ寝まるや星月夜
人生の山はまだあり雲の峰

千葉 智司

独学の左利きなり酔芙蓉
禁じらる遊びの楽し蛇毒
真実を知りたし蟬の穴覗く
石榴裂け古傷疼く鬼子母神
無神論唱う種無し葡萄熟れ

永井アイ子

バケツの水風が凹ませ燕来る
鉦かねに灯りを映し梅雨兆す
水にある眞昼の匂い著我の花
初夏やドレッシングを縦に振る
堤灯の中はからつば在祭

鈴木 瑩子

耳かざりかすかに揺れて天の川
グレープフルーツ理不尽をまっぶたつ
うす甘き男ともだちラ・フランス
夕化粧本所まうちうらものがたり
泥葱のあたたかき青それを買う

千葉 信子

18禁カレー平らげ卒業す
はじめから月容れて引く広辞苑
三鬼忌や火星探査機検討中
鳥獣蛇を逃がして山鳴りす
すすきかかるかや其処までもこれまでも

栃木 きよ

野遊びの方向音痴の薄い肩
虹消えて母の匂いを思い出す
若竹の風随えて一行詩
打ち水や縁台将棋の強面
蛸や挽歌めきたる夕の風

高橋 公子

ミルク飲みほしメーデーの旗を見る
百万塔まで行く菜の花手放さず
狐の剃刀姉をぐいぐいひつばつて
紫陽花やひねくれ一茶の蓑と笠
兄逝きてナムアマダブツ枇杷の花

高橋由紀子

灯下親しいつもオンなる電子辞書
蓮の花昨日が閉じて今日開く
七十路を折り返したき帰り花
これも命あれも命と芽吹きけり
作句とは老いのリハビリーいわし雲

鈴木 敬治

額の花職退き職の夢を見る
貧者の一灯梅雨の弘法大師廟
夕暮の神田古書街梅雨じめり
梅雨晴や今朝の珈琲香り立つ
七夕の宙にありたる未来かな

鈴木 房州

仲良しの背中合はせに菜花摘む
吐く息の消えゆく先や梅一輪
啓蟄にサンローランのシヨール着る
風花や富士に抱かれ野菜とる
寒風に朽舟深く傷さらす

徳吉洋二郎

フクシマとなりて幾とせ蛇穴を
終戦の日スプレー缶に穴あける
みんなの鳴く日鳴かぬ日まだ戦後
額顛顛顛顛顛梅雨深む
落ちる他なき噴水の午後三時

諸家近歌

鈴木まんぼう

綿虫の尻ぶくぶくと通り過ぐ
死なばわれ善き人なりき鱈大根
魔女の飛び恋猫跳びしマンハッタン
いかなごの釘煮の曲がりほどの鬱
杉戸絵の象のまろまる春の闇

田沼美智子

手のひらの記憶をともし螢かな
百匹の蜘蛛の子部屋は棺なり
白痴美の海月ゆーらりゆらゆら癒
夏季語にあまた鳥来し無音なり
あと幾たびの母の忌の鰻かな

高木 一恵

年おんな馬踏飛燕にこころ馳せ
少年に雛のうす闇はずかしき
古りしわが五体百態ねむの花
秋耕の土撫でおれば友来たる
美しい卵が二つ冬の家

下村 洋子

すかんぼやあつけらかんと飢えており
夏風邪は火星の陰謀かも知れぬ
心音の寒きあたりに杭を打つ
けものらの吐息枯葉となりて舞う
切り干の大根すでに訛りたる

佐藤 鈴子

尻餅の大きな窪み雪おんな
雪解たうたう地球もやがて水になる
春浅し止まる老犬待つ老人
さくら散るサバランひとつふたりして
桜葉降る七十年の海の底

島田 翠松

よおーいドン春が一気に駆けてきた
春風の洞より覗くアフロディテ
浮世絵のおんな翳なき日永かな
からっぽにしたら充つらん花ミモザ
ヘリオトロープ間奏曲の長き昼

鮫島いづみ

風生の空より流るるさくらかな
遠つ代の空より妹が花の散る
水鳥の二羽むつみをり真間が淵
燕子花^か図の青に先師を偲びをり
シユールなれど黒地に雅び淀の春

田中 喜翔

アリバイは完全無欠蟬の穴
雌伏して七十年や蟬しぐれ
八月をラマダンとせむ人似猿
七夕やパンタグラフの出す火花
かまきりを箒に乗せて移しけり

高野 春子

羽抜鶏金網にあるうらおもて
木洩日は少し退屈蛇の衣
青胡桃忽ち闇となる標
ともかくも今日のひまわり強く咲き
青柿の転がる今も人見知り

高橋富久江

一声づつ丁寧に鳴く初鶯
干し素麺の艶も神さび三輪冬麗
桜見る桜の風に抱かれて
メーデーを知らぬ若者渋谷混む
愛すべき父の頑固さ柏餅

鈴木 和子

天上に句座あり花の隅田川
浮くたびに川鶉の口に魚光る
若葉冷え言葉やさしい検査技師
それぞれの風を捉えて草の絮
雪やこんこ赤い長靴走りだす

高橋 節夫

列島に火の山猛る敗戦忌
父のこす軍刀に鏑敗戦忌
疎開地の村は市となり敗戦忌
鐘の無き鐘楼の跡敗戦忌
陰膳といふ膳ありき敗戦忌

中里 結

勾玉の中にも梅雨の籠りある
目隠しの鬼ばかりなりあめんぼう
いなびかり立ち上るとき手について
露葎すずめも露の眼もつ
くちびるのひんやりとして菊畑

田口満代子

漂鳥や現ごろに齊粥
啓蟄や耳打ちにくる朝の鳥
描きかけの鶴は帰りし麦の秋
短日の魚の影美し迷いあり
やみくもを直感といひ冬の滝

瀬尾 教子

こんもりと睡魔のひそむ合歡の花
病葉のベンチに隣り合うあわれ
すずやかに茅の輪のかもす葉緑素
桑苧角を曲れば村だった
朝曇脳裏をすぎる夢また夢

諸家近歌

田中 正恵

貝塚の貝押し出して霜柱
迂闊にも声が年取る寒卯
冒頭も末尾も詫びるよなぐもり
春疾風今日は駅まで遠すぎる
春愁い計るでもなく砂時計

関根 信三

山車引いて立夏の海へ揺らしゆく
凜とした僧童をば風涼し
齧り付く鮎殺生の思いあり
川開き江戸を映して乙女衣つ
羅の立居にみえる気立かな

田村 隆雄

脇役で終る奴ではない清水
夏虫の一部始終をみて自戒
一介の火の手のやがて大文字
大西日多弁な森へ暴論を
雨を着て奥つ城深く七変化

高桑婦美子

砂山と瓦礫の山と敬老日
水の動きは途方もなくて冬の風
雪やめば議論つまづく核の怪
怪談に致死量ありて雪女
紙漉いて朧というを演出する

関 千賀子

動かねば崩れる象や花の雲
父の忌の沖に向かへる蜻蛉かな
底紅の溢るる路地や長崎忌
しづもれる南部曲家すがれ虫
淡雪や湯神に小さき御柱

杉山真佐子

娑羅の実の口細詩歌口遊む
赤い羽根つけ始まつている講義
裏口に満天星紅葉火伏札
日と月と漬ける赤かぶら白かぶら
海水の濃さの平凡牡蠣啜る

富澤さち子

絵馬固く結ばれており梅三分
木の芽吹く折鶴へいのち吹き込めば
炎昼の一撃タオル投げ込まれ
皆同じ息せり汗の眼にスマホ
返信のやけに素直な水中花

高野 礼子

文庫本サイズの仮寝若葉風
飛花落花真つ只中において無才
花曇うかと仮面をはずしけり
聖五月わたしにメタリックな睡り
油照り視野に遠洋航海図

鈴木 郁子

カーテンを閉じれば哭いて雪岬
斧あとの地霊うぐめく春浅し
鏡面に風の行き交う古代雛
けものめく夜の旋律雪くるか
山藤の昂ぶるときの埴輪馬

高田 柴秋

媚びの香を五指に搦めし湯の菖蒲
子は遠く住みて父の日荷の届く
生あらば土用鰻の長さほど
雷鳴の後先き寂夜病に臥す
落葉して虫食まれゆく記憶多多

菅ノ谷文子

蝸牛生家の庭の匂いして
やわらかに歳をとりおり蝸牛
蟻の道正義の鎧身にまとい
聞き流すことも術なり夕涼み
猛暑日の哀しきものに兎の目

竹内 絵視

トナカイの雪舞いあがる月の道
平がなはをみなな化身蝶よぎる
落ちゆくを抱き止められししだれ梅
鳥の舞われ居候か諸鳥よ
眠られぬ身より次々曲流れ

内藤 富雪

滝燃ゆる落ちた夕陽に心許して
庭木切る明るい父の日があつた
真夏の夜女は女の羅生門
死は一人愛は二人の夏木立
消しゴムで消しても父の日肩車

高遠 朱音

人込みに私という水中花
ひまわりの黄色絞って登校日
カレンダーに刻む罰点法師蟬
靴ずれのひとつふたつ遠火花
錠剤の転がる先の大花野

高久 清美

白雲を生み大滝の落ちにけり
みなぎりて水唄ひ出す滝の上
滝壺に水青の馬跳ねること
畳なはる滝の真中の白き闇
外灯なきポルトイグアス夏の星

私の感銘句

西澤 繁子

妹よコスモスよこのしたたかき
イラブーの動く袋や仏桑華
瀬祭忌眼鏡に空を置き忘れ
足湯して足置いてくる十三夜
盆踊り勝手に手足まぎれ込む
柏楨に鳶を眠らせ十三夜
ふと湧きし言葉秋風さらいけり
旅立ちには口紅ひとつ冬の蝶
空缶を蹴つて花野を明るくす
だしぬけに細胞のこと春の宵
妹よコスモスよこのしたたかき

二人姉妹の姉である私には、さもありなんと
いう句である。

私の妹も遅い。しかしこの句から感じるの
は、単にしたたかなだけではない妹像である。
それは、コスモスという季語によってであらう。
なかなか風折れしない強さはあるけれども、そ
の花の装いはまことに可憐でやさしい。
姉妹のお互いへの気持ち、日ごろの関係がよく
分かるほほえましい句である。

細野 一敏

火の牙を野に放ちけり秘密法
草隴第二福竜丸錆びて
焼き鳥の空串日本革命論
蟻死なばたちまち蟻が喰いつくす
金魚死す全身打撲らしい
詫び状がまだ届かない敗戦日
梅干して疑心暗鬼を収めたる
蟻地獄に落ちてしまった記憶
梅干して普陀落渡海忘れたり
地球温暖化台風凶暴化
火の牙を野に放ちけり秘密法
野火は草生を良くし、害虫を駆除する為春先

作者名 号頁

秋谷 菊野 115 4
イザヘル真央 115 4
秋尾 敏 115 4
岡田 淑子 115 5
大川 園子 115 5
上野 紫泉 115 5
伊東 靖子 115 5
岡田美美子 115 6
石井 浩美 115 6
小川トシ子 115 6
秋谷 菊野 115 6
並木 邑人 112 2
津高里永子 113 5
松澤 龍一 113 3
山中 葛子 114 7
横須賀洋子 114 4
秋谷 菊野 115 4
荒井 玲 115 4
石井紀美子 115 5
大畑 等 115 6
岡田 春人 115 6
並木 邑人 115 6

に枯草を焼き払う事である。火は枯野を牙を剥
いた野草の様に行き。安保の周辺事態が
指針から消され、秘密法が可決。七月には集団
の自衛権の行使容認が閣議決定した。七月には集団
作者は秘密保護法の成立から始まっていく事
態を、野に火を放った様なものだと怒りを抑え
切れない。集団的自衛権といって他国攻撃すれ
ば当然報復もありうる。放った火が次々飛火し
て行く怖さ、小生も同感である。

柳澤満智子

詩の匂い平和の匂い文字涼し
山びこは二十歳の声よ夏帽子
水引草揺れねば何も起らない
冬瓜やころしづかな人とゐて
秒針の刻み遅かり雷の夜
十一時二分わたしの袴り長崎忌
爽やかな出会いのあとはいつも風
ふんだんに飲める水あり原爆忌
災天をどすと象の土踏まず
手袋へ孤独の夢を詰めている

小林 俊子

吹き溜る落葉の楽園獣らは
雁渡し背骨がずれてしましもう
天空に城あり少年ヴィオラ弾く
春眠のぐわんと河馬の口の開く
灯を消してその夜は妣といる朧
通学路ころがるように夏休み
歩かねば肉体怖し苔に花
猫の鼻拭いてやるなり桜桃忌
災天をどすと象の土踏まず
死ぬと言う大きな課題さくらんぼ
雁渡し背骨がずれてしましもう

実羽 繁 114 2
山端かすみ 114 3
山崎 政江 114 3
広瀬 梯子 114 4
松岡 節子 114 4
山崎 芳子 115 4
青木 一夫 115 4
井上きよ美 115 5
岡田 淑子 115 5
興津 恭子 115 6
永妻 和子 112 3
瀬尾 教子 112 3
内藤 富雪 113 5
原島 典子 113 7
保坂 末子 113 7
田村 隆雄 114 3
山中 葛子 114 3
イザヘル真央 115 4
岡田 淑子 115 5
岡田美美子 115 6
瀬尾 教子 115 6
青北風、空も海もあおあおとして飛んで行き
たいような気分、でも晩年になると周りの景色
に気をとられて足元が危なくなる。転ぶなよ、
あわてずゆつくりが口癖になっている。背骨が

鳴戸 奈菜

遠ひぐらし終りのような始まりで
鶴渡るこよい音なく河荒れて
流れつつ澄みゆく水や山頭火
ふらこや此の町を出て雲に乗る
独り居の言葉みな捨て夏に耐え
春の夢より覚めたまだヒトのまま
地球儀の中はからつば蟬時雨
蛇いちご女の手指なにを知る
蜂の巣を育てておりぬ物忘れ
上つて下つて女を捨てて滝の正面

岩佐 久

新米のおんな先生花は葉に
麦踏みをつぎの父の遠さかな
踏切と夕日が好きで卒業す
雪女ひとつはひとりの影曳いて
青嵐秒針休みなく急ぐ
余花の時いちばん遠くへかくれんぼ
梅が香や江戸百景の太鼓橋
梅干して疑心暗鬼を収めたる
寒に入るぬつと写楽の大首絵
だしぬけに細胞のこと春の宵

金田めぐみ

たぶん死は冬のさくらのようにくる
年とれば影も年とる柳の木
虎落笛老いに第三反抗期
薬缶から直に飲む水雲の峰
変わりた山から笑う風の綾
目刺焼く昭和の色に焦げるまで
春愁や夢を入れおく器がない
木も石も疲れの溜る熱帯夜
ゴスペルの少しの狂気年を越す

芝崎 梓 112 3
田口満代子 112 3
徳吉洋二郎 113 5
藤岡 尚子 113 6
山崎 文子 114 2
宮本美津江 114 2
森 章 114 3
山崎 政江 114 4
渡辺 礼子 115 5
大畑 等 115 6
山中 頼子 114 2
渡辺 澄 114 2
森村 文子 114 2
山崎 聡 114 2
山口 彩子 114 3
山中 葛子 114 3
馬場 暁子 114 4
荒井 玲 115 4
岩崎 令子 115 6
小川トシ子 115 6
直江 裕子 112 2
鳴戸 奈菜 112 2
長浜 聡子 113 3
中川 広子 113 5
野口 京子 113 5
松本 静顕 113 7
山崎 文子 114 2
山中とみ子 114 3
藤田 守啓 114 4

忘れないための消しゴム原爆忌

近江喜代子

新米のおんな先生花は葉に
原爆忌水平線に瑕一つ
薔薇ノ花咲ク白秋ノ隆キ鼻
蟻の列声なき声を野に放ち
富士山を胴上げにする夏木立
秋天は好青年のようなもの
生きたとは今光ること草蚩
断片のような復興だから亀が鳴く
ふんだんに飲める水あり原爆忌
寒に入るぬつと写楽の大首絵
原爆忌水平線に瑕一つ

山中 頼子 114 2
実初 繁 114 2
八木 邦夫 114 3
村田 珠子 114 3
吉田 耕史 114 4
青木 一夫 115 4
相原 一枝 115 4
明石春潮子 115 5
井上きよ美 115 5
岩崎 令子 115 6
実初 繁 115 6

眼前の蒼い空と海、緩やかに弧を描く水平線
が「今日は原爆忌だ」と気づいた途端、その景
は一瞬にしてモノクロームの写真のように見え
てきて、小さな瑕をも発見する。「瑕」は見え
ないキズをも表す文字、海面下に作者はどんな
瑕を見ているのでしょうか。
唯一の被爆国の国民として「瑕」を忘れては
ならない。一読してぐつと胸にきた句です。

田口満代子

戦争の廊下無数の寒卵
缶蹴りの鬼の子釣瓶落しかな
叙事詩あり春夕焼の丘があり
灯を消してその夜は妣といふ腫
焼き鳥の空串日本革命論
父さんの飯粒拾う今朝の秋
地に葡萄熟るる月食すすむなり
忘れないための消しゴム原爆忌
くるつと過去へまわる鉄棒雲の峰
人間を見ざる鶺鴒の目の荒野かな
地に葡萄熟るる月食すすむなり

榎垣 梧樓 113 5
藤井 稜雨 113 6
細根 栗 113 7
保坂 末子 113 7
松澤 龍一 113 7
石谷 菊野 115 4
石崎多寿子 115 4
秋尾 敏 115 4
石井紀美子 115 5
大畑 等 115 6
石崎多寿子 115 6

白雲が夜空に溶け込み、くつきりと満月が浮
かび上る。天心は刻々と地球の影のなかに入っ

てゆく。本影のなかの赤ぐるい月の光は熟れた
果実を匂わせる。古代ベルシアの沃野に豊潤な
実りを謳歌するおんなたち。作者は天地自然へ
の祈りとともに悠久のロマンを感じているのか
も知れない。「葡萄熟るる」と「月食すすむな
り」の二物配合も快い。

なかもと淑子

自画像の髪の毛の甘い小鳥くる
影を集めて晩秋のすべり台
線描のひぐらしの羽濡れている
どこかで声がしている枯野の明るさ
靴先で男が野火の向き変える
よろけ縞着て陽炎になりにゆく
梅干して疑心暗鬼を収めたる
猫の鼻拭いてやるなり桜桃忌
盆踊り勝手に手足まぎれ込む
みどりの日回游魚のように銀座

岡崎 翠 112 2
徳吉洋二郎 113 5
中村 冬美 113 5
普川 洋 113 5
保坂 末子 113 7
山口 彩子 114 3
荒井 玲 115 4
イザベル真央 115 4
大川 園子 115 5
小川トシ子 115 6

大木 雪浪

開くまで祈り続ける白つばき
空蟬になつていのに本気的眼
初夏の雲つまんで伸ばし太極拳
鶯へ返す口笛指呼の間に
冬鴉笑つていない眼が並ぶ
歳月がうしろに立てる雛流す
今日の貌今日使い切り白木槿
盆踊り勝手に手足まぎれ込む
児の試歩は起きあがりこぼし草の花
箸使ふものだけ食べる生身魂
歳月がうしろに立てる雛流す

椿 良松 112 2
種村 佑子 112 3
近江喜代子 113 5
三須 民恵 113 5
保坂ミエ子 113 6
増田 斗志 113 7
山口 夕紀 114 4
大川 園子 115 5
秋山 冷子 115 6
岡田 春人 115 6
増田 斗志 115 6

この一三号が届いたのは昨年の六月二日
である。増田さんはその六月にお亡くなりにな
った。この句に限らず、一連のお亡くなりにな
った遺作として、その句境は最高に達している。
まことに敬服に価する。増田さんの御冥福をお
祈り致します。

津田沼研究句会報告

(於津田沼一丁目町会会館)

第二七六回 (平成二十七年五月十二日)

司会 徳吉洋二郎

聞くことためらっているチユリリップ 吉野 精
憲法記念日サポーターきつく巻く 徳吉洋二郎
昭和の日ところどころにある無頼 林 阿愚林
憲法記念日昼のへりに添寝する 横須賀洋子
母の日や鶏の軟骨かみしめる イザベル真央
金の蛇棲み深閑とエンタシス 小林 実
ぼうたんの火群を映し仁王の目 榎垣 梧樓
就活を避けて巣籠る孫の顔 大塚 弘毅
あめんぼう幾つになつても利かん坊 金子 未完
二の腕の五月の雨を弾きけり 股野 久子
重力に遊びし藤のかをりかな 深山きんぎょ
落ち椿掃き寄す地底に笑う声 大村 錦子
ぺんぺんぐさ自己防衛を囃しけり 山中 葛子
夏シャツの白が地球をまわしけり 岡田 淑子
青嵐長谷川等伯森林図 前島きんや
寄席はねて五月の匂いにつままれる なかもと淑子
菜の花畑ダンベルが捨ててある 大畑 等
マグリット展出つ新緑を恐れをり 後藤 章
花は葉に男を捌く大女將 村上 澄子
夏来るあの時食べた黒玉子 白木 暢子
つつじ燃ゆ悪魔の事典裏表紙 楠見 恵子
絮に伝はるるろり空七(ぶ)プロモーション 佐藤 晏行

第二七七回 (平成二十七年六月九日)

司会 後藤 章

白木 暢子

水中花佳人は太くなりけり 榎垣 梧樓
 大腸へゆつくり落ちる海月かな 前島きんや
 籐椅子や父在りし日の真中に 深山きんぎょ
 十葉のはびこる墓の寸土かな 後藤 章
 青葉驕ドローンの目玉さまよえり 徳吉洋二郎
 皇后の帽子かたぶくアマリリス 山中 葛子
 ねぶの花かゆくてならぬ活断層 岡田 淑子
 走り梅雨赤ン坊泣く家に着く 横須賀洋子
 網戸してきれいな風に背を押され 村上 澄子
 手土産の葛餅置かれおいたまま なかもと淑子
 魂を入れ変える駅木下闇 金子 未完
 蝙蝠の舐めたる頭西より来る 大畑 等
 白玉や仕舞い込めない夢がある 林 阿愚林
 竹婦人並ぶ芸大資料室 佐藤 晏行
 痛癒えて君菖蒲田に菖蒲田に 大村 錦子
 父の日の暮れてゆくなりハタネズミ イザヘル真央
 おい青田特選米になつてくれ 吉野 精
 保冷ボトル深い井戸の音がした 楠見 恵子
 富士の山赤く染まりて栗の花 大塚 弘毅
 栗の花下り電車へ大荷物 股野 久子

●第二七八回 (平成二十七年七月十四日)
 司会 佐藤 晏行

つゆあけの三橋敏雄の海に出る 岡田 淑子
 暑すぎて涙腺かわく別れなり 横須賀洋子
 蕙の花はじけ天女の声のせり 大塚 弘毅
 空間に折鶴のある喪失感 小林 実
 普陀落は晒し鯨を提げて行く 徳吉洋二郎
 蚊柱のぐらぐら雲形定規かな 山中 葛子
 寝が足りぬ小憎いほどの夾竹桃 なかもと淑子
 ゆで卵に醤油一滴蛇の皮 イザヘル真央
 花でいご大樹の下のわかれ道 股野 久子
 地の果ては葛に隠さる渚かな 大畑 等
 釈迦も阿難も西瓜食うとき塩をふる 榎垣 梧樓
 ぬつと出て甘えの残る今年竹 村上 澄子
 ステーキにワインは赤の星まつり 吉野 精
 青田波歩く人あり正比例 白木 暢子
 梅雨寒や世間ずれた一円玉 佐藤 晏行

青葉研究句会報告

●第四十七回 (平成二十七年五月二十八日)
 (於：千葉市民会館・第五会議室)
 司会 鈴木まんぼう

若葉山鳶が二時に鳴きにくる 鈴木まんぼう
 松の芯未来は安泰のポーズ 三須 民恵
 灸花と教えてやればまた摘まむ 加藤 法子
 すかんぼや小さな嘘と大き嘘 椿 良松
 万緑や山いつばいのミュウジカル 大塚 弘毅
 耳開き象は飛びたる薄暑光 山崎 幸子
 ふふわのベッドが包むはじき豆 小高 稔
 憲法の日盲導犬のうしろゆく 徳吉洋二郎

バラ花芯見えて見えぬものばかり 芝崎 梓
 楽々と妻の手玉に乗る薄暑 細野 一敏
 柿若葉上総のじじいになる積り 矢野 忠男
 万緑の包容力や野辺送り 石井紀美子
 目覚ましが追いかけてくる墓 並木 邑人
 噴水の腰がくだけてそれつきり 細根 栞
 両腕を翼に翼に五月の森 長浜 聰子
 サラダボールから弾き出す初夏の風 馬淵 津枝

夕焼は遷都のごとし吉利支丹 小林 実
 夕焼が黄泉の階段降りてくる 芝崎 梓
 ハンカチを振つて今では妻でいる 細野 一敏
 行き場なき詩の蹲り水中花 並木 邑人
 殻破る自分に飽きた蝸牛 椿 良松
 さつね雨男の汗と擦れ違ふ 加藤 法子
 空港に世界の時刻かたつむり 鈴木まんぼう
 新じゃがいも湯気には軽い下心 三須 民恵
 戦争の身近に来るか蟾蜍 山崎 幸子
 決別もまた忘却も蜥蜴の尾 長浜 聰子
 女あり今もシャネルの五番なり 細根 栞
 人体の輪切りの写真さみだるる 徳吉洋二郎
 会者定離まだ捨て切れぬ朴の花 大塚 弘毅
 羽抜け鶏伊達の薄着も四十まで 馬淵 津枝
 やまもの実の落つ屋根に生れたり 大畑 等
 梅雨寒し猫がやたらに寄ってくる 小高 稔
 薔薇真つ赤バルドーの如鋭き棘 矢野 忠男
 蝸牛だまつていてはわからない 石井紀美子

●第四十九回（平成二十七年七月二十三日）

司会 長浜 聰子

極太の油性マジック海開き 芝崎 梓
 夏のカフカ玉こんにやくに辛子付け 大畑 等
 雲積んで積んで晩夏の底力 石井紀美子
 すかし百合切切として崖はあり 加藤 法子
 水中眼鏡駅の階段ころげ落つ 細野 一敏
 寄り掛かりし柱ぐらつく終戦忌 長浜 聰子
 八月や梅干しちよこつと持ち歩く 馬淵 津枝
 ムクムクが少し足りない雲の峰 細根 栞
 裏事情有り不揃いにメロン切る 三須 民恵
 西瓜切る中から悲鳴あつたような 椿 良松
 忽然と揚羽一頭波高し 徳吉洋二郎
 炎昼のクレーン孤軍抜刀す 並木 邑人
 勝手口を叩くは妣や夏の蝶 山崎 幸子
 憂きことを旅の海月へ託しけり 鈴木まほろ
 蜘蛛の囲やじはた獲物見張る主 小高 稔
 滯筋はてんでんしのぎ今朝秋 矢野 忠男
 火は緋にして霊の戸を開ける夏袴 小林 実

柏研究句会報告

（於：柏市「ハックルベリー」2階）

●第三十七回（平成二十七年六月十三日）

司会 野口 京子

縄電車顔の大きなお婆たち 大畑 等
 父の日や体重計を贈らるる 岡田 春人
 主なき夏炉の灰を片寄せて 伊藤 希眸
 残る悔残さず癒す濃紫陽花 小張 直子
 マグマ捉ふカメラ少年雲の峯 佐藤 鈴子
 花空木いのちの継目軋みおり 下村 洋子

大泣きの稚とセツシヨン梅雨しとど 栃木 きよ
 わたくしに気づいてほしい梅雨蛭 長井 寛
 黒堀のしのび返しに夏落葉 野口 京子

●第三十八回（平成二十七年七月十一日）

司会 高橋 宗史

あかいあかい四万六千日のパッハ 大畑 等
 闇よりも大き気懸り梅雨鮪 長井 寛
 高野山宿坊勤行の涼し 岡田 春人
 中学生我等炎天のバスケット 高橋 宗史
 五箇山に椽の花咲く牢の跡 イザベル真央
 曼荼羅の遠く近くを毛虫這う 下村 洋子
 幸を呼ぶグラジオラスの黄色きいろ 野口 京子
 邪気払う玉砂利の音夏の光 栃木 きよ
 葛茂り音の緩びや珈琲館 小林 俊子
 街薄暑A B型の血が欲しい 松澤 龍一

●第三十九回（平成二十七年八月八日）

司会 高橋 宗史

八月や片道切符で征きし兄 小張 直子
 梨の花うたたね癖は母ゆずり 栃木 きよ
 蛇だけに会ひて墓より戻りけり 岡田 春人
 境界はドクダミの白陰陽師 佐藤 鈴子
 八月の食虫植物寡黙なり 下村 洋子
 月面の笑窪のごとき蟻地獄 長井 寛
 夢解きのはじめ福島立葵 大畑 等
 鯛が鳴いております日本語で 高橋 宗史
 虹の天辺割つてしまへり黒い雲 伊藤 希眸
 命日に子が来て帰る今朝の秋 イザベル真央
 立秋の律儀な風にハミングス 野口 京子
 口ずさみつつ炎天の革命歌 松澤 龍一

ひろば

■第百四十二回野田俳句連盟春季大会

平成二十七年四月二十六日（日）に野田市興風会館に於いて第百四十二回野田俳句連盟春季大会が開かれた。出席者七十名、欠席投句者二十九名。席題は「菜の花」。

（松澤龍一記）

入賞者（三句合点） 代表句

市長賞

未黒野や残り時間が風となる 小張 直子

議長賞

風呂敷に包む日本語昭和の日 内藤 富雪

教育長賞

柿若葉百歳の声よくとほり 松本八重子

連盟賞

菜の花の沸騰点に母を置く 岡田 淑子

考えの堂堂めぐりねぎ坊主 佐々木京子

六位

手の平に藤房の量感をおく 藤岡 貞夫

七位

鳩を放とう父を放とう菜の花へ 市川 唯子

八位

自転車は俺の相棒花菜風 金田めぐみ

九位

薄氷に近いところで髪を切る 椎名 鳳人

十位

竜天に登る鉛筆とがらせて 佐藤 晏行

第四回 ミニ吟行会

銚子犬吠埼エリア

日時 平成二十七年七月十二日(日)

会場 イオンモール銚子店

司会 山田 邦彦

参加者 二十名

大型台風9号・10号の襲来の報じられる中、その心配も薄れて銚子駅に集まった句友、ホームで受けを済まして予定の銚子電鉄に乗り換える。切符は車内の筈がワンマン電車、市内の女子高生がボランティアでアイスクリームや濡煎餅など食品販売。電車はガタコトと単線を走る。二十分足らずで目的の犬吠駅へ。終点の外川へ行く者は居ないようだ。自家用車組など四名を除いて灯台を目指して出発。



犬吠埼にて

歩くこと十分、目の前に白亜の灯台がと思っているのにそれらしきものが見えない。空も海もすべてが深い海霧の中、海岸の遊歩道へ行くもの、ベンチで一休み句作に入るもの。帰り支度に入る頃やっと霧も晴れて灯台も勇姿を現す。

帰路はシャトルバスで海岸線廻り。時間通り来ないバスを待っている、土手の草むらから青大将が首を出し大騒ぎ。

銚子駅前に戻って大急ぎの昼食。俳句会場へ急ぐ。会場は市内を避けて郊外へ。残り時間も少なくなつたが慣れたさばきで句会が進む。本部方式の司会者による各自の披露。高得点句から選んだ理由、採らなかつた意見あり充実した時間だった。

予定のバスに乗り銚子駅へ。それぞれの帰途に急ぐ。(中村棹舟記)

参加者作品(二句のうち一句)

- 競りあとの鱗の光り梅雨の明 池田 博臣
- とっぱずれ灯台白し夏の霧 内田 正成
- 海霧噴いて始まる白亜紀のイルカショー 大畑 等
- 青大将去るにぎやかなバス停 岡田 春人
- すかし百合波が本気で呑みにくる 加藤 法子
- 油照り灯台突然現れる 小林 実
- 海霧は白 ここで生まれたとは 白木 暢子
- 油照り遅れしバスののぼり坂 鈴木 瑩子
- 大波の果ては夏霧総の海 高橋 宗史
- 夏雲や朱色眩しき観音堂 高橋 博

図書紹介

句集『瀬の祭り』 三苦 知夫

平成二十七年五月二十五日 株式会社文學の森
二十歳はるか枯野に加熱のオートバイ
高炉わが墓標のごとし夕枯野
雪霏々と胸の楽器がひとり鳴る



虚子の句碑



中村棹舟顧問と山田邦彦さん

- 白南風や小魚捌くお婆さん 徳吉洋二郎
- 梅雨晴や海の深さは色で読む 中村 棹舟
- 銚子幻影暑熱の街をうろつけり 檜垣 梧樓
- 海霧や男波女波の中を割る 細野 一敏
- 白靴のあてもないのに海に来る 増田 豊子
- 銚子吟行百年の計事始め みちのくたろう
- 白南風や白き闇もつ突っぱずれ 矢野 忠男
- 荒波は海霧と化しをり空と海 山崎 幸子
- 曇日や時折ひかる夏の海 山田 邦彦
- 白亜紀の泥岩かぎりなく炎天 渡辺 澄

《会員・会友の近況》

- ・五月は北陸新幹線に初乗車し、新緑の富山・岐阜・長野の旅。六月はアメリカのヨセミテやグランドキャニオン等の七つの国立公園巡りの旅。七月は大雪山とその周辺の山の登山とお花畑めぐりです。(田端 重彦)
- ・今年の三月末で三十八年勤めた会社を定年退職しました。ようやくリズムに慣れてきたこの頃ですが、時々職場の夢を見て、また悟りかけていないかと思うこの頃です。(鈴木 敬治)
- ・なかなか例会に出られませんが、「秋」のインターネット句会にて勉強しております。時代の流れを感じます。(鈴木 房州)
- ・今号から松澤編集長のお手伝いをさせて頂いています。まだ分からないことばかりです。お気付きの点ありましたらご教示の程宜しくお願い致します。(徳吉洋二郎)
- ・俳句の感性の乏しさを、感じる毎日です。(鈴木まんぼう)
- ・とにかく夏を乗り切つて…と思っています。(高桑婦美子)
- ・通院に忙しい日々を過ごしております。(菅ノ谷文子)
- ・千葉県へ引越してきて早一年。夏バテしつつも、なんとかwebデザイナーとして働いております。今年の夏、自室にいながら熱中症となつてしまいました。なんとも苦しい初体験でありました。体調管理にはよくよく気をつけたいと思います。(高遠 朱音)
- ・「秋」編集長を勇退してカルチャーに出講しています。縁あって、千葉市のご依頼で男女共同参画センターでも句会をしています。(高久 清美)

掲示板

《会員・会友異動》

- 入会 (会員) 大坂吉也、佐藤美奈穂、高坂 健、中嶋三雄、渡邊竹庵
 - 逝去 (会友) 荒木洋子、倉岡けい
 - 退会 (会員) 篠田鶴之助、羽瀨順子、吉田耕史、希田沙知子、荒井芳子、村上 亘、前田清方
 - 移転 (会友) 平野喜久枝
 - (会員) 渡邊廣子(東金市田間に地番変更)、染谷光葉(野田市花輪へ地区内移転)
- 平成二十七年第二回幹事会
- 日時 平成二十七年五月二十六日(火)
- 場所 船橋市勤労市民センター
- 議題
- 一、平成二十七年定期総会・俳句大会の結果と収支報告について
 - 二、春の吟行会の結果と収支報告について
 - 三、三十五周年記念大会について
 - 四、ミニ吟行会(銚子)について
 - 五、第一一七号会報について
 - 六、現代俳句協会(本部)の動向について
 - 七、第二十二回関東甲信越・静ブロック連絡会議について
 - 八、各研究句会の状況について
 - 九、平成二十八年度俳句大会 大会係、選者諾否について
 - 十、その他

□□事務局・編集部だより□□

- 猛暑の続いた夏でした。それにもめげず、各地の研究句会など回を重ね、盛況でした。皆様、お身体大切に。
- 平成二十八年三月二十日(日)に定期総会・俳句大会を開催します。早くも俳句大会の作品募集が始まります。他地区会員、会員以外の方も参加できます。奮ってご応募をお願いします。
- 三十五周年記念俳句大会の作品応募チラシを同封し、皆さまに早めにお知らせするために、今号の発行時期をすこし早めました。

創立三十五周年記念俳句大会のお知らせ

同封の案内をご覧ください。宇多喜代子先生の講演に加えて、事前投句の特選句には先生の色紙も用意しています。皆さまのご投句をお待ちしています。

現代俳句千葉 第一一八号

平成二十七年八月十八日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長 大畑 等

現代俳句千葉編集部

〒278-0037 野田市野田六六五番地

千葉県現代俳句協会事務局 松澤 龍一

〒270-1471 船橋市小室町二八〇四

電話〇四七-四四七-二九一二

FAX〇四七-四四七-二九七二